

先人の知恵から

44

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

44回、よくまあ続けていると我ながらあきれる。同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返り、気を付けつつ、最後まで行きたいと思っている。

今回は「ツ行、テ行」から以下の10個。

・罪を憎んで人を憎まず

・泥中の^{はちす}蓮

・敵に味方あり、味方に敵あり

・鉄は熱いうちに打て

・寺から出れば坊主

・出る杭は打たれる

・天知る地知る我知る人知る

・天に^{つば}唾す

・天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず

・天網恢恢疎にして漏らさず^{てんもうかいかいそ}

＜罪を憎んで人を憎まず＞

犯した罪は憎むべきであるが、その罪を犯すに至るまでにはそれなりの事情もあるわけだから、罪を犯した人そのものを憎んではいけないという教え。「其の罪を憎んで其の人を憎まず」ともいう。「憎む」は「悪（にく）む」とも書く。

出典 ^{くそうし} 孔叢子

この諺は子育てに関する、色々な場面で使える。例えば学校では、いじめの問題が起ることがある。そんな時、スクールカウンセラーとしては、被害者も加害者もカウンセリングを受けさせたいと思う。しかし、大抵は、被害者中心で、加害者までと言うことは少ない。勿論、被害者優先はよいのだが、加害者にも様々な問題があることが多い。ただ注意や叱責、指導だけでは解決に至らないことが多いのだ。A君が加害者だとしたら、A君は過去にいじめにあっていたかも

しれない。家で虐待されているかもしれない。B君から命令されていたかもしれない。子どもは未熟である。まだ成長途上である。それなのに、時々、「Aはだめだ。あいつは見込みない」と見捨ててしまう教師がいる。どんなに悪いと言われている子でも、良いところは必ずある。行動が間違っているとしても、行動は修正できる。しかしその子本人を否定してしまったら、その子は立ち直ることができなくなる。

罪は罪、問題行動は問題行動として認め、それをしっかり理解させること、償わせることは必要だが、子ども本人にも何らかの事情はある。そこもしっかり理解し、受け止めた上で、本人は立ち直れるのだと信じて話すことがいかに大事かを、この諺を使いながら伝えている。

これは保護者たちに対しても同様である。発達障害の子どもたちも、問題行動をおこしてしまうことはある。しかしその問題行動も、その前に何かきっかけがある。起こった行動だけに目を向けてしまうと、本人否定になりがちである。「この子のせいで・・・」「この子は見込みない」「この子生まなきゃよかった」そんな言葉が漏れることさえある。だから同様に話す。問題行動の陰に隠れた子どもの不安やフラストレーションに目をしっかり向けること、それを受けての行動修正、それが何より大事だが、そのためには、その子に変えられる力があると信じる必要があるのだ。

<泥中の蓮>

周囲の悪い環境に染まらずに、心の清らかさを保って正しく生きるさまのたとえ。

汚い泥沼の中でも、蓮は清らかな花を咲かせることから。「泥の中の蓮」ともいう。

また、「蓮」は「はす」とも読む。^{でい}「涅すれども^{くろ}縊まず」も同義。

出典 ^{ゆいまきょう}維摩經

周りの環境に流されるということは子どもの場合多い。子どもは保護者、家族や周りの大人をモデルにして育っていくことが多いからだ。教え、導くべき保護者が、良い見本を見せてくれれば、子どもたちも見本を見習って育っていくだろう。しかし、どこにあっても、例外的に周りに染まらない子はいる。周りが良いから必ず良い子になるとは限らないかもしれない。同様に、周りがいかに劣悪な環境であっても、まっすぐに、優しく、素敵な子に育っている子も見かけるのは事実だ。「掃き溜めに鶴」も同様の意で使われている。

実際、犯罪者の集団のような家庭にあって、一人だけ、真面目で素直な良い子に出会ったことがある。この子は決して犯罪や一般的に悪いことをしなかった。周囲の家族員を反面教師として自分だけはこうならないと思ったのか、それとも、周りとは全く関係なく我が道を通したのかは謎だが、そういう子ができることも事実である。

周りの人や家族のせいにばかりする子や保護者に出会うと、私はこの例を挙げながらこの諺を伝えている。要は本人次第で、その泥沼から抜け出したいと思うなら助けてくれる人はいくらでもいると知っていてほしいし、泥沼にあっても蓮の花のように大輪の、素敵な花を咲かせて欲しいと思うから。

＜敵に味方あり、味方に敵あり＞

対立する立場の人の中にも、自分をよく理解したり、自分に同情したりしてくれる者がいるかもしれない反面、味方だと思って安心している者たちの中にも、隙を伺っている油断のできないものがあるかもしれないということ。

この諺は使い方に注意が必要である。人を信じられない人に、この諺を伝えたら、「やっぱり人は信じられない」となってしまう。敵と思っていても味方になってくれる人が居るといくら伝えても、「敵は敵」と思っているところへ、「味方にも敵がいる」と言うわけだから、「それでは誰も信じられないではないか」となるのである。

この諺は、前述のように、敵は全く信せず、味方は完全に信じてしまうような、そして敵と味方を完全に分けてしまうような、極端な人間関係を作っている人に丁寧に伝えるようにしている。

その人の人間関係を振り返ってみてもらい、友人として信じていた人に裏切られた経験や、苦手だとか嫌いだとか思っていた人が実はとても良い人だとわかり、関係が上手く築け、良い友達になった経験などを思い出してもらうのである。

そういうことは大抵一回や二回経験しているもので、理解してもらいやすい。そういう経験がなかった人には、最初から人を嫌えば、その人の良いところは見えなくなるので、まずはその人の良い面を見るようにしてみてもどうかと伝える。そして一つでも良い面を見つけられれば、その人をそこまで嫌わなくてよくなるし、そうなるとその人との関係もそこまで悪くはならないだろ

うと伝えるのだ。また、仲良しに裏切られることがあったとしても、仲良しが本当に信じられる人だったかどうかを再検討していくと、人の悪口をよく言う人だったとか、その人の信用できないと思われる言動がわかったりするので、そのこと指摘して、もともと信用できない人だったことを理解してもらう。子どもの場合、誰かの悪口でつながる関係性と言うものも多い。人の悪口ばかり言う人は大体信用できないと思った方がよい。

人を信じるということは、中々難しい。だから、あからさまにすべてをさらけだすのは得策ではないという結論になる。そういう意味でも、この諺を伝えている。

英語では・・・

It is better to have an open foe than a dissembling friend. (偽りの友を持つよりも、あからさまな敵をもつほうがよい)

＜鉄は熱いうちに打て＞

鉄は真っ赤に焼けているうちは柔らかいので、打っていろいろな形のものを作れるように、人間も純粋な精神を失わない若いうちに十分に鍛えることが大切であるということ。また、新しいことを始める時、関係者の熱意が盛り上がっているうちに実行しないと、成功しにくいということ。何事にも時機を逃してはならないという教え。イギリスの諺の訳語。

この諺は有名なもので、昭和の人であれば大抵知っているだろう。若いうち、柔軟なうちに、しっかり鍛えるのが良いということ

で、子どもや若者の教育などの際によく使われてきた。しかし、勘違いする人もいる。

「打て」というのは、鉄を鍛える時には確かに叩くが、人を叩けと言っているわけではない。叩いたりしたら今なら虐待で通報される。また、「鍛える」と言う言葉も、昭和であれば、星一徹のような鍛え方を想像してしまう人がいる。体罰や暴言を肯定しているのと勘違いしてしまうひとがいるのだ。

そういうことではない。最初に述べたように、若く、柔らかな精神、或いは頭脳にとっては、いろいろなことが素直に吸収しやすいが、歳をとってしまうと、体と同様に精神や頭脳にも柔軟性が減って、吸収力も衰える。だから若いうちがよいのだということだ。若いうちが適切な時期ということである。

そして、意味のところでも述べられているように、何事にも時機があり、それを逸すると物事は上手くいかない。

子どもを育てる時、子どもだから、スポンジのように何でも吸収するし、教え甲斐もある。子どもが興味を持てば猶更吸収しやすくなる。興味を持った時が、ちょうどよい時期となる。そんな風にこの諺を伝えている。

英語では・・・

Strike while the iron is hot.

＜寺から出れば坊主＞

物事を大雑把に分類したり早とちりの判断をしたりすることのたとえ。また、その様に判断されても仕方がないという意味でも用いる。寺から出てきた人は、すべて僧侶と

みなしてしまうという意から。

この諺は、子どもたちに使うことが多い。ある子が、小学校低学年の子だが、友達関係の話をすると、「AちゃんはBちゃんと一緒にいたから、Bちゃんの仲間だし、CちゃんもBちゃんと話していたからBちゃんの仲間、Bちゃん嫌いだからAちゃんもCちゃんも嫌い。」と言ったとする。そんな子にこの諺を出して考えてもらおう。「寺から出てきたらみんな坊主かな?」「警察から出てきたらみんな警察官かな?」もちろんその子は「違う」という。「そうだよね。じゃあ、AちゃんやCちゃんは本当にBちゃんの仲間なのかな?たまたま話をしていただけかもしれないし、そばにいただけかもしれない。仲間なのかどうかは、確認してみなくちゃわからないね」と伝えるとわかってくれる。

保護者の場合でも、同様のことが無いわけではない。幼稚園や小学校の子どもの友達付き合いに口をはさむ親は結構いる。その中でも、保護者同士の仲が悪いと、子どもたち同士の関係にもひびが入ることが多い。親は親、子は子のはずなのだが、「あの子とは付き合わないで」とか「あの家の子は親が親だからろくなもんじゃない」などと言う保護者がいる。そんな保護者に、この諺や、前述の「泥中の蓮」を出して伝える。自分が遊ぶ仲間を決めるのは本人自身であり、そこに口を挟むのはやめよう、相手の子を偏見のない目で見てみようと。但し、年齢が上がって、中高生にもなると、相手の子自身の行動に問題があれば、そこは意見をしても良いだろう。

＜出る杭は打たれる＞

優れて頭角を現す人は、人に妬まれたり憎まれたりしやすいことのたとえ。また、出過ぎた振る舞いをする、とかく非難されるというたとえ。杭が並んでいる場合、一本だけ高ければ、ほかの杭にそろそろよう打ち込まれるということから。「差しでる杭は打たれる」「出る釘は打たれる」ともいう。

出過ぎた真似をして非難されるというのはわかるが、優れて頭角を現すことで人に妬まれたり憎まれたりするというのは悲しいことだと思う。しかし現実、学校では、百点ばかり取ると目立つからわざといくつか間違える子や、答えがわかっているのに挙手をしていない子などがいる。目立つといじめのターゲットにされるからというのだ。ひたすら自分の能力を隠し、目立たないようにしていることで、透明人間化している。自己の存在感をなるべく消しているという。

人付き合いが苦手だからと、一人で居れば「ボッチ」（ちょっと古い言葉だが）と言われ、こういう子はトイレで弁当を食べていたりする。それはそれで目立つ。いじめの対象になることもある。

友達が多く、明るく、元気な子は、友達作りが苦手な子から憧れられるが、その上成績もよいとなると、同じように友達が多く、人気のある子から妬まれることもある。どっちが上か、どっちがかわいいか、どっちが優秀か、どっちが足が速いか等、一つ一つで競争がある。その競争に巻き込まれるのが嫌な子は、可愛くても、成績が良くても、スポーツが出来ても、出る杭は打たれるからと自分の能力を抑える。

人を認め合えることができるようになれ

ば良いのだが、まだまだそれには時間がかかりそうである。出る杭が打たれない世界になってほしいという思いを込めてこの諺をあげた。

英語では・・・

Envy is the companion of honor. (嫉妬は名声につきまとう友である)

＜天知る地知る我知る人知る＞

誰も知らないと思っても、天と地と自分と相手の四者が知っているから、悪事や不正は必ず発覚するものだといひませう。

「四知（しち）」ともいう。

出典 後漢書

どんなに秘密にしている、いつかは他人に漏れてしまう。「人の口には戸が立てられない」なども同様に、秘密といっても守られるとは限らないという戒めである。秘密を洩らしたという話は、どの世界でも聞かれる。マル秘文書の漏洩が社会でも見られるのだから、子どもの世界での秘密漏洩は日常茶飯事である。AちゃんからBちゃんへ「二人だけの秘密だよ」と伝えたとしても、BちゃんからCくんへ「秘密だよ」と言ってAちゃんの話が伝わっていくのだ。アッという間にAちゃんの話はクラス中に伝わっていたなどということもある。

一般的に秘密は守られないものと考えればよいという意味でこの諺を伝える。但し我々医師や心理師、弁護士等の守秘義務が課せられる人々の間では、違法なこと以外は守秘が守られねばならないのはいうまでもない。

英語では・・・

The day has eyes, the night has ears.
(昼に目あり、夜に耳あり)

<天に唾^{つば}す>

人に害を与えようとして、自分がひどい目にあうことのたとえ。空を仰いで唾を吐いても天を汚すことはできず、自分の顔に降りかかってくることから。「唾」は「つばき」とも読む。「天に向かって唾を吐く」「天を仰いで唾する」「仰いで唾を吐く」ともいう。「お天道様に石」も類語。

出典 四十二章経

子どもたちにこの諺を伝えるのは、誰かの悪口を言っている子に対してが多い。他人のことを悪く言えばいずれ自分が悪く言われるようになる。

ある子が誰かの悪口を言っていると、それを聞いた子が、悪口を言われている子に伝える。悪口を言われた子は、最初に言った子の悪口を言う。それを聞いた子がまたその悪口を最初に言った子に伝える。つまりまわりまわって自分に返ってくるのである。だから人の悪口は言わないようにしようと伝えている。

英語では・・・

The stone you throw will fall on your own head. (投げた石は自らの頭上に落ちる)

<天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず>

人間は生まれた時からすべて平等であって身分の上下などなく、貧富・家柄・職業などによって差別されるべきではないということ。福沢諭吉の「学問のすすめ」にあることは。「彼も人なり、^{われ}予も人なり」は類語。
出典 学問のすすめ

福沢諭吉の有名な言葉であり、大好きな言葉の一つである。職業差別をする人を見ると、嫌悪感すら出てしまう。弱い人、自分より下と感じた人には横柄な態度をとり、偉い人には平身低頭で、おべっかばかり使っているような人を見ると腹が立つ。だからというわけではないが、人はみんな平等であるという考え方を子どもたちには持ってほしい。

時々会社の社員寮等で、上司と部下が同じアパートに住んでいると、上司の奥様は、部下の奥様より上、上司の子どもも、部下の子どもより上と言う上下関係を言う人がいる。なんと人間が小さいのかと思う。上司の奥様も、部下の奥様も、或いはその子どもたちも、全く別に考えるべきだろう。差別されたり区別されたりして、辛い思いをしているのは部下の方である。そんな理不尽な話はない。いやな思いをしている子どもや保護者に対して、この諺をだして、媚び諂う必要などなく、堂々としていようと伝えている。

<天網恢恢疎^{てんもうかいかい}にして漏^もらさず>

天罰を逃れることはできないということのたとえ。天が張り巡らした網の目は粗い

が、悪いことをした人は一人も漏らすことなく処罰する。天道は厳正であって、悪いことをすればいつかは必ず報いがあるという意。「天網恢恢疎にして失わず」ともいう。恢恢とは広く大きいさま。疎とは目が粗いこと。 出典 老子

この諺も大好きな諺の一つで、悪いことはいずればれてしまうということで、子どもたちに伝えている。この言葉自体は難しいので、かみ砕いて説明をする。小さな事であっても、悪いことはみつかるのだから、最初からしない方が良く、嘘を付けば、その嘘もいずればれてしまうので付かない方が良い。完全犯罪はあり得ないし、罪を犯せば必ずつかまり、漏れることなく罰をうけるのだから。

出典説明

孔叢子・・・一巻二十一編

中国、孔子8世の孫。漢の孔鮒（字は子魚）の撰と伝えられる書。講師及びその代々の子孫の言行を載せる。

維摩経・・・

大乘仏教経典の一つ。別名「不可思議解脱経」。サンスクリット原典とチベット語訳、三種の漢訳が残存する。旧来の仏教の

固定性を批判し在家者の立場から大乘仏教の軸たる「空思想」を高揚する。内容は中インド、ヴァイシャリーの長者ヴィマラキールティにまつわる物語。

後漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。南朝、宋の范曄と西晋の司馬彪の撰。後漢一代の歴史を記したもので、本紀（帝王の伝記）・列伝（臣下などの伝記）は范曄の撰に唐の李賢が注を加え、志（社会・文化など）の部分は梁の劉昭が司馬彪の『続漢書』から取ったもので注も加えている。志の「東夷伝」には日本のついで記述がある。

四十二章経・・・四十二章

仏教最初の漢訳経典とされる。後漢のとき、仏教を初めて中国に伝えた中インドの僧迦葉摩騰・竺法蘭が訳した。後漢末から三国時代には成立していたものと推定されるが、伝世の経の内容は南朝の南齊から梁にかけて成立したとされる。

学問のすゝめ・・・

福沢諭吉の著書の一つで代表作。幕末・維新期の日本人に多大な影響を与え、日本の近代化を促進した西洋文明入門書。西洋の先端的技術や社会制度など、日本の近代化に必要な情報と知識を、自らの渡米・渡欧体験をもとに、わかりやすく体系的に紹介している。